

合衆国南部における綿作モノカルチャーの 進展について

川 端 実 美

目 次

1. はじめに
2. 黒人労働力の輸入
3. 南部経済の特色
4. 南部農業と労働力
5. おわりに

1. はじめに

18世紀から19世紀の合衆国南部における綿作モノカルチャーの進展は黒人奴隷制度が基礎になっていると考えられる。本稿では、黒人奴隷制度を通して綿花の生産と輸出の問題を分析しながら南部農業と労働力の関係を明らかにしていくものである。

南部農業と労働力の関係の把握のために、最初に、アフリカ黒人の新大陸への移動と奴隷制度について触れ、南部特有の奴隷制プランテーション生産様式に立脚した南部経済の特色について言及していく。最後に、南部農業と労働力の関係について考察していくものである。

なお、南部についての地域的な範囲は、1910年の国勢調査によって規定された南部大西洋岸や東南中部と西南中部の3地域とする。

2. 黒人労働力の輸入

黒人奴隷制度は綿花との関連から合衆国南部特有の制度のように考えられているが、ブラジルや中央アメリカなどを含むカリブ海沿岸地域全体にも存在し

た制度である¹⁾。このような奴隷制度は文明の夜明けとともに誕生し、時代の経過の中で拡大・縮小を繰り返してきた。人間が奴隷となる過程は幾通りもある。例を挙げれば、イタリア人が黒海地域の商業活動の中で金銭で購入した奴隷、あるいは、ムーア人などのように宗教戦争の結果捕虜となり、他の諸国の捕虜たちとともに奴隷にされる場合などである²⁾。合衆国における黒人奴隷は農場の労働力問題に起因した奴隷貿易から生まれたものであり、それに基づいて合衆国特有の奴隷制度が確立したのである。

それでは、黒人奴隷の新世界への移動はいつ頃から始まったのだろうか。スペイン人植民地行政官の黒人の移動に関する記述から1502年という年が明らかになる³⁾が、これが奴隷としての移動であるかどうかは疑問が残る。奴隷労働力（植民地労働力）としての最初のアフリカ黒人の輸入は1619年にオランダ船からヴァージニアに売却された20人であると考えの方が妥当であろう⁴⁾。16世

表1 新世界における奴隷輸入状況

地 域	全体に占める割合
ブラジル	38
イギリス領カリブ海諸島	17
フランス領カリブ海諸島	17
スペイン領アメリカ	17
合衆国	6
オランダ領・デンマーク領・スエーデン領カリブ海諸島	6
計	100%

(出典) Robert William Fogel, Stanley Lewis Engerman, *Time on the Cross*, 1974. (『苦難のとき アメリカ・ニグロ奴隷制の経済学』田口芳弘、榊原胖男・渋谷昭彦訳、創文社、1981年、P14)

紀から19世紀後半までの新世界への奴隷輸入の状況は表1から、アフリカ人の移動の約950万人以上のうち、38%がブラジルであり、イギリス領・フランス領・スペイン領のカリブ海諸島、スペイン領アメリカへの移動を合計するとその数はブラ

ジルをはるかに上回り、60%弱である。本稿で問題とする合衆国への移動はわずか6%にしかすぎない⁵⁾。

今度は、合衆国に20人の黒人奴隷が売却されてからの黒人奴隷数の増加を把握するために、まず、黒人人口の増加をみてみよう。植民地時代の黒人人口の推定を表す表2や南部植民地の黒人人口の増加を示す表3より、黒人人口は

1650年頃から増え始め、1780年には57万5,000人余りに達している。

次に、黒人人口の推移をとらえた上で黒人奴隷数の増加について考えてみよう。17世紀から18世紀の半ば頃にかけてのヴァージニアにおける黒人奴隷数の

表2 植民地時代の黒人人口の推定

年	黒人人口	年	黒人人口
1630	60 [△]	1710	44,866 [△]
1640	597	1720	68,839
1650	1,600	1730	91,021
1660	2,920	1740	150,024
1670	4,535	1750	236,420
1680	6,971	1760	325,806
1690	16,729	1770	459,822
1700	27,817	1780	575,420

(出典) 本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波書店、
1993年、P37

表3 南部植民地の黒人人口の増加(単位:1,000人)

	1700年	1720年	1740年	1760年	1780年
ヴァージニア	16.4	26.6	60.0	140.6	220.6
サウスカロライナ	2.4	12.0	30.0	57.3	97.0
ノースカロライナ	0.4	3.0	11.0	33.6	91.0
メリーランド	3.2	12.5	24.0	49.0	80.5
ジョージア	—	—	—	3.6	20.8
全植民地	27.8	68.8	150.0	325.8	575.4

(出典) 岡田泰男・永田啓恭『概説アメリカ経済史』有斐閣、
1991年、P93

表4 ヴァージニアにおける黒人奴隷数の推移

年	総人口	黒人奴隷数
1640	— [△]	150 [△]
1670	40,000	2,000
1690	53,000	9,000
1710	78,000	23,000
1750	231,000	102,000

(出典) 本田創造『アメリカ黒人の歴史』, P39

推移は表4の通りである。この州をみただけでも黒人奴隷が増加している。合衆国における全体的な黒人奴隷数は1800年から1860年代の当時の状況をとらえた表5と表6からみてみることにする。表5より、1800年代の南部では総人口に対して黒人奴隷の占める割合は30%台で率としては年々低下しているものの、人数的には増加していることが理解できる。次に、表6より、合衆国における総人口に対して黒人奴隷の占める割合は10%台であり、率としては南部の1/2の数値でしかないが年毎に黒人奴隷の絶対数は増えているのである。

かつて、マルサスは当時の北アメリカの状況をとらえて、人口は幾何級数的増加を示していると「人口論」の中で主張した⁶⁾が、黒人奴隷の増加については彼の主張がほぼ当てはまると考えてよい。

表5 南部15奴隷州における白人人口と黒人人口の増加（1830—60年）

年	白人	自由黒人	奴隷	計
1830	3,633,195	175,918	1,999,356	5,808,469
1840	4,601,873	207,214	2,481,632	7,290,719
1850	6,184,477	228,128	3,200,364	9,612,969
1860	8,038,966	250,787	3,950,511	12,240,294

（出典）本田創造『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』

岩波書店、1964年、P138～139

表5は本田創造、『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』のP138～139の第4・7表を簡略化した。

表6 19世紀前半における合衆国の人口増加

年	総人口	白人	黒人	黒人奴隷	自由黒人	その他
1800	5,308,483	4,306,446	1,002,037	893,602	108,435
1810	7,239,881	5,862,073	1,377,808	1,191,362	186,446
1820	9,638,453	7,886,797	1,771,656	1,538,022	233,634
1830	12,866,020	10,537,378	2,328,642	2,009,043	319,599
1840	17,069,453	14,195,805	2,873,648	2,487,355	386,293
1850	23,191,876	19,553,068	3,638,808	3,204,313	434,495
1860	31,443,321	26,922,537	4,441,830	3,953,760	488,070	78,954

（出典）本田創造、『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』、P135

なぜ、合衆国南部においてこのような黒人奴隷人口の増加がみられたのであ

ろうか。最初、イギリスの植民者たちは農場の労働力として原住民であるインディアンに奴隷化を考えた。しかし、彼らは未開の氏族社会で生活している狩猟民であり、農耕も未発達で農場の労働力としては不向きで彼らの奴隷化はうまくいかなかった。そこで、植民者たちはイギリス本国で土地を奪われた農民や都市の貧窮民などの移民労働者＝白人年期奉公人を労働力として考えるようになった⁷⁾。ところが、年期奉公人は年季の契約が切れると自由な小農民となり農場を去っていくことから、植民者たちは絶えず年期奉公人を確保せねばならなかった。しかし、当時の合衆国南部では煙草プランテーションが発展途上の段階にあり、年期奉公人の需要に供給が追いつかなくなり労働力不足が顕著となった⁸⁾。そこで、より安定した恒久的な労働力の確保がプランテーション経営のために必要・不可欠なものとなり⁹⁾、白人の年期奉公人の代りに黒人奴隷が導入されたのである¹⁰⁾。このようなプランテーション労働力の白人から黒人奴隷への転換の状況を本田氏は次のように述べている。「初めの頃、自由人1人にたいして白人の年期奉公人6人という高率を維持していたメリーランドでも、1658年には1,000人以上の白人奉公人を輸入していたのに、1696年には625人、1697年には353人と次第にその輸入を減じ、1710年にはその総人口4万3,000人弱の19%にあたる約8,000人が黒人奴隷だったのにたいして、白人奉公人は7%にあたる約3,000人にすぎなかった。そして、18世紀後半の独立革命の頃になると、植民地に輸入される白人奉公人は殆どいなくなってしまった。」¹¹⁾ また、前述した1800年から1860年にかけての黒人奴隷数の推移からもそのようなプランテーション労働力の転換を容易に推測でき、合衆国黒人奴隷制度が定着したことがわかる。

以上より、黒人奴隷数の増加は安定したプランテーション労働力の確保に起因した黒人奴隷の輸入に端を発したものであるといえよう。

3. 南部経済の特色

南部経済を特徴づけるものは奴隷制プランテーションの存在であろう。奴隷制プランテーションは奴隷所有者であるプランターと黒人奴隷との関係を基礎

に置いている制度である。

最初に、奴隷制プランテーションの定義づけをしておこう。プランテーションは、最初は、ただ単なる「植民地」、あるいは、「開拓地」程度の意味合いでしかなかったが、南部植民地の発展過程の中で、徐々に農業生産上における一つの型として発展し、制度が確立した¹²⁾。プランテーションの特徴を本田氏が「奴隷労働という不自由労働を基礎にし、『資本』によって経営される大規模な商業的農業企業」であり、「それは本源的蓄積期のイギリス商業資本が植民地収奪のために生み出した前近代的な搾取制度」である¹³⁾と述べていることから、本田氏の主張を本稿では奴隷制プランテーションの定義とする。合衆国南部における奴隷制プランテーションは、「典型的には数百～数千エーカーの土地を所有し、その一部を耕地として多数の奴隷を使って輸出向け単一作物を生産する商業的農場」をいう¹⁴⁾のである。

次に、具体的に奴隷制プランテーションの特色についてみてみよう。植民地時代から南部では温暖な気候を利用して煙草や米、藍や砂糖、麻などの主要作物が栽培されており、ヨーロッパなどの海外市場向けの生産が大規模に展開されていた¹⁵⁾。特に、煙草と米は南部の重要な商品作物であった。

煙草の場合、表7より、煙草が1612年にヴァージニアで栽培されて以来、生産は増加の一途をたどり、1790年には1億3,000万ポンドの生産高を上げ、「アメリカの総輸出品のなかで第1位を占め、その輸出額も450万ドルを越した。」¹⁶⁾

表7 煙草の生産高 (単位1,000ポンド)

年	生産高
1618	20
1620	55
1639	1,500
1688	29,147
1765	75,482
1774	100,000
1790	130,000

(出典) 本田創造, 『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』, P64～65

ところが、1850年頃から減り始め、次第に綿花に押されるようになった。

煙草と違い、米の栽培地区は極端に限定される。サウス・カロライナとジョージアの低湿地帯で栽培されたが、生産高をみると、最大で1850年の2億1,531万ポンドであり、徐々に

減少し、1860年は1億1,900万ポンドであった。このような減少の原因として、米作プランターが綿花プランターに転じたことが挙げられる¹⁷⁾。

ここで、注意しなければならないのは煙草や米、藍などの主要商品作物が海外輸出向けに生産されるという点である。そのことはそれらの主要商品作物が海外市場に大きく依存することを意味しており、次のような状態が現出された。独立直後の南部では煙草や米、藍などの主要商品作物の海外市場狭隘化のため、輸出市場が不安定となり煙草などの価格が暴落した。また、イギリスが煙草を列挙品目に指定して自国の貿易独占下に置くなどの重商主義規制と収奪のため、南部は危機に陥った。さらに、奴隷価格の高騰により、膨大な数の奴隷の存在がプランターの死活問題としてクローズ・アップされ、奴隷制は根底から大きく崩壊しようとしていた¹⁸⁾。

このような南部を蘇生させ南部農業を再建する道として考えられたのは北部型の多角的な農業の道ではなく、奴隷制プランテーションを復活させ、それを強化する道であり、綿花が主導的役割を果たしたのであった¹⁹⁾。綿花は、最初、サウス・カロライナやジョージアなどの海岸地方で長繊維の海島綿が栽培されていたがその栽培には地域が限定され、自然的成育条件からも広大な内陸部での栽培には適していなかった。ところが、短繊維の陸地綿は内陸部での栽培に適しており、E・ホイットニーが1793年に綿繰機を発明したことにより種子と繊維との分離作業上の技術的問題が解決され、綿花の栽培が内陸部まで拡大された。このような綿花栽培の拡大が大幅な生産増をもたらし、南部農業を大きく綿作に集中・特化させることとなり、南部の主要商品作物は煙草から綿花へと大きく転換したのである²⁰⁾。

次に、奴隷制プランテーションの経営について分析してみよう。奴隷制プランテーションはプランターと呼ばれる奴隷所有者によって経営されていた。プランターは次の3つに区分できる。奴隷を50人以上所有するプランターを大プランターといい、10人から49人の間の奴隷を所有するプランターを中プランターという。そして、奴隷を9人以下しか所有していないプランターを小プランターというのである²¹⁾。このような区分をもとに階層別に奴隷所有状況をみてみる

と、小プランター層は奴隷所有者の72%を占め、奴隷総数の26%の奴隷を所有する。しかし、大プランター層は奴隷所有者の3%しか占めていないのに、ほぼ、小プランター層と同数の25%の奴隷を所有しているのである。また、奴隷所有の大プランターへの集中化は低南部で顕著であった²²⁾。このような状況の中で、南部のプランターたちは奴隷制度を通じてコストを下げるのに成功し、世界市場でインドやエジプト綿との価格競争に打ち勝ち、莫大な富を獲得したのである²³⁾。

プランターの経営で重要な役割を果たしたのがファクター制度であった。ファクターと呼ばれた代理人が綿花の集荷地であり積出港でもあるチャールストンやニューオリンズなど、また、綿花の輸出港であるニューヨークに在住し、各プランテーションで生産された綿花を引取り、主にイギリスとの綿花貿易の仲介をしていた。彼らの主な収入源は綿花引取りに関する2.5%の手数料であった。さらに、彼らはプランターたちに奴隷を購入する際の費用や生活必需品購入のための資金を貸付ける金融業者でもあった。資金を貸付ける条件として作物を抵当に入れさせたり、前貸を通じて徐々にプランターに作物の種類や収穫量までも指定するような関係を構築し、プランターを債務奴隷として従属させていった²⁴⁾。

このようなプランターとファクターの関係強化により奴隷制プランテーションはヨーロッパの資本主義と密接に貿易面で結合し、E・D・ジュノヴィーズが主張したように、南部の奴隷制は「資本主義により強く変容され、資本主義の枠にはめこまれた奴隷制」²⁵⁾ 的状況下であり、プランテーション経営はヨーロッパ資本主義に大きく依存することになったのである。しかし、資本主義はプランテーションの内部までは浸透していない²⁶⁾。また、南北戦争前の合衆国は経済の後進国であり、工業も発展途上の段階にあった。近代化のためにもイギリスなどから技術を導入したり、様々な工業製品を輸入せねばならなかった。そのため、工業部門では大幅な輸入超過となったが、ファクターの仲介による綿花貿易によって獲得した収入でその入超を決済した²⁷⁾。しかし、そのことが合衆国経済をイギリスなどのヨーロッパの諸国の従属下に置き、合衆国経済は

海外の動向により大きく影響を受けることになったのである。

今度は、南部における土地所有についてみてみよう。北部（特に、ニューイングランド植民地など）では「『タウン制度』のように集団への土地付与と比較的均等な個人への土地分配」²⁸⁾ がなされ、「『自由な農民』による小土地所有制が発展した」²⁹⁾ が、大土地所有の形成につながることはなかった。ところが、南部では次の2つの方法により大土地所有化が進展した。一つは、移民奨励方法として考え出された「人頭権制」である。これは「移民1人あたり、50エーカーの土地を無償で付与する」³⁰⁾ 土地付与方法である。この制度により土地の集積が進み、大土地所有の基礎が形成された³¹⁾。しかし、船主や商人を中心にこの制度の乱用がみられ、奴隷にまで適用するなどの弊害が起こり、次のような土地売却制が採用されたのである。それは「人頭権制」の乱用防止策であり、「50エーカーの土地を5シリングで個人に売り渡すもの」であった。ところが、価格の安さから、富裕な人々たちへの土地の集積が進み大土地所有化が加速された³²⁾。他に、長子相続制や限嗣相続制によっても大土地所有化は進められた。このようにして、奴隷制プランテーション経営の基盤である大土地所有化が南部全体に展開され、大プランター層などがそれらを所有し綿花を生産したのである。

表8 州別綿花生産高 （単位：100万ポンド）

州	1801年	1811年	1821年	1834年	1849年	1859年
ノース・カロライナ	4.0	7.0	10.0	9.5	29.5	64.6
サウス・カロライナ	20.0	40.0	50.0	65.5	120.0	141.0
ジョージア	10.0	20.0	45.0	75.0	199.6	312.3
フロリダ	—	—	—	20.0	18.0	29.9
アラバマ	—	—	20.0	85.0	225.8	440.5
ミシシッピ	—	—	10.0	85.0	194.0	535.1
ルイジアナ	—	2.0	10.0	62.0	71.0	311.0
テキサス	—	—	—	—	23.2	193.1
アーカンソー	—	—	—	0.5	26.1	163.0
テネシー	1.0	3.0	20.0	45.0	77.8	132.0
その他	5.0	8.0	12.0	10.0	1.6	24.7

（出典）鈴木圭一『アメリカ経済史Ⅰ』東京大学出版会，1988年，P200

さらに、綿花生産地の移動についてもみてみる必要があろう。表8より、綿作地帯の地域的な移動が読み取れる。1801年から1811年にかけてはサウス・カロライナやジョージアなどの東部大西洋岸地域で綿花が生産されていたが、1821年頃になると、アラバマやミシシッピ、ルイジアナやテネシーでも生産されるようになり、1834年から1859年までをみると、ジョージアやアラバマ、ミシシッピやルイジアナの生産のウエイトが年々高くなっているのがわかる。このことから、綿作地帯の低南部への移動が明らかとなる。綿作地帯の低南部への移動は、粗放的な経営方法で行われている単一の商品作物の栽培に基づく地力涸渇からもたらされたプランテーション制の地域的拡大である「西漸運動」

表9 南部15奴隷州における工業の状態（1860年）

州	工場数	資 本 (ドル)	労働者数		生産高 (ドル)
			男	女	
ア ラ バ マ	1,459	9,098,181	6,792	1,097	10,588,571
アーカンソー	518	1,316,610	1,831	46	2,880,578
デラウェア	615	5,452,887	5,465	956	9,892,902
フロリダ	185	1,874,125	2,297	157	2,447,969
ジョージア	1,890	10,890,875	9,511	2,064	16,925,564
ケンタッキー	3,450	20,256,579	19,587	1,671	37,931,240
ルイジアナ	1,744	7,151,172	7,873	916	15,587,473
メリーランド	3,083	23,230,608	21,930	6,773	41,735,157
ミシシッピ	976	4,384,492	4,583	192	6,590,687
ミズーリ	3,157	20,034,220	18,646	1,036	41,781,651
ノース・カロライナ	3,689	9,693,703	12,106	2,111	16,678,698
サウス・カロライナ	1,230	6,931,756	6,066	898	8,619,195
テネシー	2,572	14,426,261	11,582	946	17,987,225
テキサス	983	3,272,450	3,338	111	6,577,202
ヴァージニア	5,385	26,935,560	32,606	3,568	50,652,124
合 計	30,396	164,949,479	164,213	22,542	286,876,236
合衆国にたいする割合	22.0%	16.3%	14.2%		15.2%
合衆国総計	140,433	1,009,855,715	1,040,349	270,897	1,885,861,676

（出典）本田創造、『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』、P206

の南西部型といい換えることもできる³³⁾。

ここで、南部工業について触れておかねばならない。表9は、1860年の南部奴隷州における南部工業の実態を表すものである。南部15奴隷州の工場数や資本、労働者数や生産高は合衆国全体と比較してみると、合衆国総計に対して南部の占める割合は工場数だけが20%を超えており、以下は全て10%台である。このことから、北部工業と比較した場合、南部工業は未発達段階にあったといえよう。なぜ、このような状態が現出されたのであろうか。その理由として、奴隷制プランテーションの存在が挙げられる。南部が少数の大プランターたちによって掌握されていたため内部では社会的分業の展開がみられず、中産的生産者の形成が阻止されたのである。南部は綿花生産を中心とする農業社会であった。綿花の優位性が工業製品の生産に傾注することよりも南部に莫大な利益をもたらしたのである。このような状態が生活に必要な物資も含めて工業製品の需要に対する供給をイギリスや北部に求めたのである。以上のように、南部の工業は北部の工業やイギリスに大きく立ち遅れることとなった³⁴⁾。

4. 南部農業と労働力

イギリスでは18世紀の30年代頃から紡績機や力織機の発明が相次ぎ、蒸気機関が動力源として木綿工業に導入されることにより産業革命が進行³⁵⁾し、綿花に対する需要が高まった。当初、イギリスは原綿をインドやエジプトから輸入していたが、19世紀の初頭頃から合衆国、特に南部綿に需要の大半を求めるようになった³⁶⁾のである。合衆国ではようやくニューイングランド地方で木綿工

表10 イギリスの原綿輸入高
(単位10,000ポンド)

年	綿花輸入高
1750	234
1800	5,601
1830	26,396
1860	140,000

(出典) 鈴木圭一、『アメリカ経済史Ⅰ』, P200

業が発達し始めたばかりで、合衆国国内における綿花の需要は極めて少なかった。

初めに、イギリスの綿花輸入高の推移をみてみよう。

表10より、1750年はわずか234万ポンドを輸入してい

たが、1800年になると、輸入高は1750年の20倍強となっている。1830年と1860年の綿花生産高はそれぞれ1750年の約100倍、600倍である。このことはカートライト力織機の実用化による産業革命の急速な進展を裏付けるものであるとい

表11 合衆国の綿花生産量 (単位：バール) えよう。

年	生産量
1790	3,000
1800	73,000
1810	178,000
1820	334,000
1830	731,000
1840	1,346,000
1850	2,134,000
1860	3,837,000

(出典) 本田創造, 『アメリカ黒人の歴史』, P64

表12 綿花輸出 (単位：1,000バール)

年次	生産高	輸出高	(対英輸出高)	輸出率%
1800	156	79	71	55
1810	346	373	145	111
1820	606	484	302	79
1830	976	839	596	89
1840	2,178	1,876	1,247	86
1850	2,334	1,590	1,107	68
1860	4,861	3,774	2,669	76

(出典) 岡田泰男・永田啓恭, 『概説アメリカ経済史』, P103

表13 合衆国の綿花の輸出

年	総輸出額に対する割合
1840	50%
1850	50%
1860	58%

(出典) 本田創造, 『アメリカ黒人の歴史』, P64～65

次に、イギリスの綿花供給地である合衆国に眼を向けてみよう。まず、合衆国の綿花生産量について検討してみる。表11から、1790年は3,000バールしか生産していなかったが、1800年頃から増加し始め、70年経過した1860年には1790年の約1,000倍強の生産量を上げている。このような合衆国の綿花生産量の推移と前述したイギリスの綿花輸入高の推移が同じ傾向を示していることや、表12の合衆国の綿花輸出における対英輸出高の動きから、綿花における両国の相互依存関係の深さが明らかとなる。また、表12の輸出率の数値の大きさから綿花が極めて秀れた輸出作物であった³⁷⁾こ

とも理解できる。

ここで、合衆国経済と綿花の輸出との関係について言及しよう。表13の合衆

国全体の総輸出額に対して綿花輸出の占める割合が、1840年と1850年はともに50%、1860年では58%であることから、次の2点が明らかとなる。第1点は、1840年から1860年の合衆国は農業中心の社会であったということ。第2点は、合衆国経済は綿花に大きく依存していたことである。特に、第2点に関して、南部の綿花が合衆国南部だけでなく、合衆国全体、さらには、イギリス経済までも揺るがすような影響を及ぼす力を保有している状況を、サウス・カロライナのジェームズ・ハモンドは1858年3月4日の合衆国議会で次のように述べている。「もしも3年間、少しの綿花も供給されないとしたら、いったい、どのような事態が起こるだろうか。……イギリスは完全に倒壊し、他の文明世界もすべてその巻き添えにしてしまうだろう。だが、南部だけは別である。綿花にたいて戦争をしかけられる者が、はたしているだろうか。いや、誰もいないのだ。いかなる権力も綿花と戦争することなどできない。綿花は王者である!」³⁸⁾

また、綿花の輸出によって合衆国国内において次のような状況がもたらされたのである。(1) 綿花の輸出によって獲得された収入が綿花輸出産業自体を発展させた。(2) 南部の黒人奴隷を含めた人口の増加が西部の食糧に対する需要増大をもたらし、西部における南部向けの食糧生産が盛んになった。(3) (2)の状況が人々の西部移住を促進させる要因になった。(4) 北部において、南部と西部の工業製品の需要に応じるための様々な工業の興隆がみられた³⁹⁾。

以上のように、綿花が合衆国経済やイギリス経済に与えた影響を把握した上で、綿花を生産する労働力と合衆国経済との関係について考察することにする。綿花プランテーションでは既述したように、そこでの労働力は時間的経過の中で原住民であるインディアンや白人の年奉公人に一時的に依存したが、17世紀の終わり頃から黒人奴隷へと転換し始め⁴⁰⁾、急激に黒人奴隷の労働力に対する依存度が高まった。小農民やプア・ホワイトと呼ばれる白人の貧農らも綿花生産に従事したが、彼らの生産高が合衆国全体の綿花生産高に占める割合としては極端に低いことから、この場合、小農民やプア・ホワイトたちの労働力はさほど重要ではない。留意しなければならないのは少数のプランターの精神的・肉体的支配の中で、黒人たちが当時の合衆国経済を支える綿花の生産に従事し

ていたという事実である。生産の3要素の一つである労働力としてはインディアンや白人の年奉公人は不適格であった。唯一、黒人だけがプランターの意図する労働者であり、綿花の生産に従事したのである。その結果、1860年だけでも486万1,000バールの生産高を上げることができた⁴¹⁾のである。

以上のような実情から、綿花生産の労働力として大きく貢献したのは黒人奴隷たちであり、彼らの労働力がそれが合衆国経済を実質的に根底から支える役割を果たしたといえるのである。周知のように、黒人奴隷たちは南北戦争前には賃金労働者ではなかった。また、少数のプランターから搾取され続けたために彼ら自身合衆国の工業製品に対する需要をほとんど生み出すこともなかった。しかし、そうであっても、明らかに奴隷制プランテーションの労働力は黒人たちだったのであり、そのことにより南部において綿作モノカルチャーの進展がみられたのである。

5. おわりに

これまでみてきたように、黒人奴隷の形成過程や南部経済を特徴づける奴隷制プランテーション、特に、綿作モノカルチャーを推進させるプランテーションに関連した問題を分析することによって合衆国の南部農業と黒人奴隷労働力の関係が明らかになった。また、1584年にエリザベス女王の寵臣ローレー卿の探検隊がノース・カロライナに上陸してから現在までの約400年の合衆国の歴史の中で、18世紀から19世紀にかけて、綿花が奴隷制度を基礎にした奴隷制プランテーションを通して生産の増加やそれに伴う輸出の増大をもたらしたことも確認できたが、今後の研究課題として、(1) 独立革命と奴隷制度の関係、(2) 北部農業と西部農業の特色、(3) 南部奴隷制の崩壊とそれに関する諸問題を取り上げ、より詳細な分析が必要であろう。

(註)

- 1) 安武秀岳『大陸国家の夢 新書アメリカ合衆国史①』講談社、1988年、P148。

- 2) Robert William Fogel. Stanley Lewis Engerman, *Time on the Cross*, 1974
『苦難のとき アメリカ・ニグロ奴隷制の経済学』
田口芳弘・榊原胖男・渋谷昭彦訳, 創文社, 1981年, P13)。
- 3) Robert William Fogel. Stanley Lewis Engerman, *op.cit.*
『苦難のとき アメリカ・ニグロ奴隷制の経済学』, P14)。
- 4) 本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波書店, 1993年, P21。
岡田泰男・永田啓恭『概説アメリカ経済史』有斐閣, 1991年, P92。
野村達朗『「民族」で読むアメリカ』講談社, 1992年, P63。
- 5) Robert William Fogel. Stanley Lewis Engerman, *op.cit.*
『苦難のとき アメリカ・ニグロ奴隷制の経済学』, P14)。
- 6) 伊藤善市『現代人の経済学』有斐閣, 1972年, P54。
- 7) 本田創造, 『アメリカ黒人の歴史』, P32。
- 8) 岡田泰男・永田啓恭, 『概説アメリカ経済史』, P92。
- 9) 岡田泰男・永田啓恭, 『概説アメリカ経済史』, P92。
- 10) 野村達朗, 『「民族」で読むアメリカ』, P65。
- 11) 本田創造, 『アメリカ黒人の歴史』, P37。
- 12) 本田創造, 『アメリカ黒人の歴史』, P61～62。
- 13) 本田創造, 『アメリカ黒人の歴史』, P62。
- 14) 岡田泰男・永田啓恭, 『概説アメリカ経済史』, P97。
- 15) 野村達朗, 『「民族」で読むアメリカ』, P65。
- 16) 本田創造『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』岩波書店, 1964年,
P65。
- 17) 本田創造, 『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』, P66。
- 18) 有賀貞・大下尚一『概説アメリカ史 ニューワールドの夢と現実』
有斐閣, 1979年, P85。
岡田泰男・永田啓恭, 『概説アメリカ経済史』, P95。
鈴木圭介『アメリカ経済史Ⅰ』東京大学出版会, 1988年, P199。
- 19) 鈴木圭介, 『アメリカ経済史Ⅰ』, P199。
- 20) 鈴木圭介, 『アメリカ経済史Ⅰ』, P199。
岡田泰男・永田啓恭, 『概説アメリカ経済史』, P95。
- 21) 鈴木圭介, 『アメリカ経済史Ⅰ』, P205。
- 22) 鈴木圭介, 『アメリカ経済史Ⅰ』, P206～207。
- 23) 野村達朗, 『「民族」で読むアメリカ』, P71。
- 24) 鈴木圭介, 『アメリカ経済史Ⅰ』, P211。
岡田泰男・永田啓恭, 『概説アメリカ経済史』, P102～103。
- 25) 岡田泰男・永田啓恭, 『概説アメリカ経済史』, P98。

- 26) 岡田泰男・永田啓恭,『概説アメリカ経済史』, P98。
- 27) 有賀貞・大下尚一,『概説アメリカ史 ニューワールドの夢と現実』, P85~86。
- 28) 鈴木圭介,『アメリカ経済史 I』, P46。
- 29) 岡田泰男・永田啓恭,『概説アメリカ経済史』, P11。
- 30) 岡田泰男・永田啓恭,『概説アメリカ経済史』, P91。
- 31) 鈴木圭介,『アメリカ経済史 I』, P46。
- 32) 岡田泰男・永田啓恭,『概説アメリカ経済史』, P91。
鈴木圭介,『アメリカ経済史 I』, P46。
- 33) 鈴木圭介,『アメリカ経済史 I』, P208。
- 34) 鈴木圭介,『アメリカ経済史 I』, P213~215。
- 35) 小林良彰『経済史入門』実教出版, 1991年, P190~191。
- 36) 鈴木圭介,『アメリカ経済史 I』, P200。
- 37) 岡田泰男, 永田啓恭,『概説アメリカ経済史』, P102。
- 38) 本田創造,『アメリカ黒人の歴史』, P65。
- 39) 有賀貞・大下尚一,『概説アメリカ史 ニューワールドの夢と現実』, P86。
- 40) 岡田泰男・永田啓恭,『概説アメリカ経済史』, P92。
- 41) 岡田泰男・永田啓恭,『概説アメリカ経済史』, P103。

(主要参考文献)

- ・Stuart Bruchey, *Growth of the Modern American Economy*, 1975。
(『アメリカ経済史』石井修・米田巖共訳, 日本経済評論社, 1980年)。
- ・菊池謙一『アメリカにおける前資本制遺制』未来社, 1976年。
- ・菊池謙一『アメリカ黒人奴隷制度と南北戦争』未来社, 1984年。
- ・岡部直祐『アメリカ経済の成長と構造』東洋経済新報社, 1972年。
- ・Harold Underwood Faulkner, *American Economic History*, New York, 1960。(『アメリカ経済史』小原敬士訳, 至誠堂, 1971年)。
- ・本田創造『私は黒人奴隷だった』岩波書店, 1993年。
- ・オクタビオ・イアンニ『奴隷制と資本主義』神代修訳, 大月書店, 1981年。
- ・大塚久雄・高橋幸八郎・松田智雄『西洋経済史講座Ⅲ』岩波書店, 1965年。
- ・Vann Woodward, *The Comparative Approach To American History*, 1968。(『アメリカ史の新観点 上巻』今津晃・斎藤眞監修, 大下尚一・麻田貞雄他訳, 南雲堂, 1976年)。
- ・Howard Zinn, *A Peoples History of The United States*, 1980。(『民衆のアメリカ史 [上]』猿谷要監修, 富田虎男訳, ティビーエス・ブリタニカ, 1982年)。
- ・Alistair Cooke, *America*, London, 1973。(『アメリカ この巨大さの物語⑤』

- 鈴木健次、桜井元雄訳、日本放送協会、1980年)。
- ・猿谷要『物語アメリカの歴史』中央公論社、1992年。
 - ・Roderick Nash, *From These Beginnings—a Biographical Approach to American History*, 1987. (『人物アメリカ史(上)』足立康訳、新潮社、1989年)。
 - ・米川伸一『概説イギリス経済史』有斐閣、1990年。
 - ・アレックス・ヘイリー『ルーツ I・II・III』安岡章太郎、松田銑共訳、社会思想社、1978年。
 - ・Robert William Fogel, *Ten Lectures on The New Economic History*, 1977. (『アメリカ経済発展の再考察』今津見、斎藤眞監修、田口芳弘、渋谷昭彦訳、南雲堂、1977年)。
 - ・Bell Irvin Wiley, *The Road to Appomattox*, 1974. (『南北戦争の歴史』今津見、斎藤眞監修、三浦進訳、南雲堂、1976年)。
 - ・都留重人・本田創造・宮野啓二『アメリカ資本主義の成立と展開』岩波書店、1974年。
 - ・『アメリカ古典文庫19 黒人論集』山形正男、古賀邦子、砂田一郎、小山起功訳、研究社、1988年。
 - ・山岸義夫『南北戦争研究序説』ミネルヴァ書房、1973年。
 - ・アメリカ学会『原典 アメリカ史 第3巻』岩波書店、1982年。
 - ・Tohon Hope Franklin, *Race And History*, Louisiana, 1989. (『人種と歴史 黒人歴史家のみたアメリカ社会』本田創造監訳、岩波書店、1993年)。
 - ・清水博『世界万国史8 アメリカ史』山川出版社、1979年。